

らいつ プラス

「世界の色々な国を知ろう」。小学生を対象としたこんなコンテストのスピーチコンテストが8月末、東京都内で開かれた。英語で自己紹介をした後、大使館を訪れるなどして自分で調べた世界中の国や地域の文化や風土を発表する。「国際化」という英語学習に偏りがちだが、英語力アップに加えて世界中の国や地域について学んでもらう狙いがある。

「マイ・ドリーム・イズ・トゥ・ビー・ア・ドクター」「私が担当したベルギーについてお話しします」。8月29日、東京都府中市の東京外国語大学。55人の小学生がそれぞれ約1分間英語で自己紹介し、その後日本語でスピーチをした。スピーチではそれぞれが担当した国について「ギリシャでは「こんにちは」は「ヤス」と言います」などと、自分で作ったポスターを使いながら説明。ロシア担当の女子が民族衣装をまとうたり、スペイン担当の男子が赤い布で闘牛士のまねをしたりして、観衆を沸かせた。

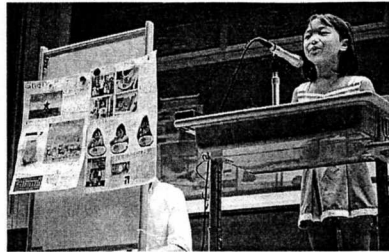
最後は「ギリシャには世界遺産は何カ所ある?」「中国で一番数の多い漢字は?」など子供が考え出したクイズを会場に投げかけ、大人の頭も悩ませた。

このコンテストは、子供の国際理解教育に携わる相馬田香さん(31)が中心となり企画した。国際協力機構(JICA)や留学支援団体「AFS日本協会」が後援。参加料は教材費などを合わせて3000円だ。

準備自体が重要

特徴は、発表当日の1日限りでなく、本番に向けた準備に時間をかけること。応募した55人は計33カ国の「ミニ大使」に任命され、渡された資料をもとに、インターネットなども駆使し

英語と一緒に 小学生、異文化研究



こども国際スピーチコンテストでスピーチする小学生(8月29日、東京都府中市)

幅広い言語 学習の場も

教育現場では英語中心の傾向が強いが、より幅広い言語や文化を学ぶ取り組みも始まっている。

東京都目黒区では7月、区立小学校で朗読グループ「多言語絵本の会レインボー」による読み聞かせ活動が始まった。中国やロシア人らが低学年に母国語の絵本を読み、自国の紹介もする。石原弘子代表は「小学生のころに触れた外国語が成長した後に勉強するきっかけになったという例も聞く」。

小学校に「国際理解協力員」を派遣する神奈川県藤沢市のような取り組みもある。

て文化や言語、風土を調べた。

参加した子供の中には海外での生活経験が長く、流ちょうに英語を使いこなす子供もいるが、そんな子にはあえて文化や宗教も欧米とは異なる英語圏以外の国の熟練度によって部門を3段階に分けたほか、特別賞

も用意し、「担当国についてどれだけ一生懸命知ろうとしたかも評価ポイントだ」と相馬さん。

山田詩織さん(8)と麟太郎君(7)は兄弟で参加。ベルギーやスペインのミニ大使となり「チョコレート」のゴディバがベルギー名物とは知らなかった。「ガウディの建物がすごかった。勉強にも付き添った母親の千尋さんは「英語の習得は

大使館訪ね衣食を体験

人前で話す力も

大会前には英語レッスンやスピーチ指導のほか、日本留学中の外国人学生らの体験談を聞いた。7カ国の大使館を訪問する機会も。サウジアラビア大使館では駐日大使の子供が迎え、民族衣装を着たり、特産のデザート(ナツメヤシ)を食べたりした。大使館側も

もつらんだが、世界の色々な国を知ってほしい」と賛同する。

上野陸君(7)と海君(7)の双子は夏休みの多くの時間を調べ物や練習に割いた。母の美絵さんは「自分なりに調べたことを形にしよう」と頑張っていた」と話す。担当した国を調べるため、その国出身の母を持つ同級生に資料をもらうなどして仲良くなったという児童もいた。



コンテストの準備のため外国人留学生と話をしている。

国を知ってもらう機会として歓迎しており、スウェーデン大使館のカイ・レイニウス参事官は「こうした機会を増やしたい」と話す。

相馬さんは「世界の人とコミュニケーションを取るには英語が最も良いツールだが、英語を話せるだけでは国際舞台で活躍できることにはならない。異文化理解や人前で堂々とプレゼンできる力の養成にも主眼を置いた」と話す。来年度以降も継続して開催する予定だという。

自由になった機関車の喜び



フリードリヒ・フェルト・作、赤坂三好・絵、鈴木武樹・訳、偕成社、1050円

をもらった! もらった!」と、大喜びで冒険に出ます。

森の中を行くと、妹の命を救う、夜中にだけ咲く花を探している少年に会いました。1414は少年を乗せて走り回ります。おかげで命は助かり、お礼にチョコレート入りの石炭と砂糖水ももらって帰った1414はまた元気に働き続けるのでした。

1414の自由の喜び、活力がほとばしります。温かい線描きと所々のカラーページの手描きが楽しい本です。(かいだんぶんこ 後藤 啓子)

こころの一冊

本を借りるといつも喜々としておけいこに飛び出していき子が「まだここにいる」とぐずり、急がお母さんをハラハラさせたことがあります。

61年間、休まず走り続けてきた機関車の1414にも、同じことがありました。途中で駅が1つもない、2つの駅の間を行き来するだけの毎日に、飽き飽きしてしまっただけです。

動こうとせず「疲れた」という1414に、運転手のアルフレートはある晩、内緒で1晩だけ休みをやることにしました。自由になった1414は「休

「きかんしゃ1414」